

リビングには必ず一冊の辞書を

# 探検、発見、『広辞苑』

国語辞典の代表選手的存在といえるのが、岩波書店の『広辞苑』。

中型の国語辞典であると同時に、手軽な百科事典でもあり、ときに昼寝の枕にもなる。その言葉の大海原を探検し、掘り出し物を発見しているのが永江朗さんだ。そのおもしろさを永江さんに聞いてみた。

ライター  
永江 朗

●ながえ・あきら 1958年、北海道生まれ。西武百貨店系洋書店に勤務後、雑誌編集を経てフリーライターに。2013年より近畿大学非常勤講師も務める。『不良のための読書術』（筑摩書房）、『広辞苑の中の掘り出し日本語』（バジリコ）、『おじさんの哲学』（原書房）ほか著書多数。

## 日本語はビジュアル語

私は「本は引くもの、辞書は読むもの」と言っています。普通は逆ですが、仕事の半分近くを書評が占めていることもあって、本については書評のためのポイントを探して読むことが多い。それに、本は最初から最後まで読み通す必要はないという

のがモットーなんです。だから本は引くもの。

対する辞書は、知らない言葉、未知の言葉との出会いを楽しみながら読むもの。とくに紙の辞書はそうですね。

二〇一一年に出版した『広辞苑の中の掘り出し日本語』（バジリコ）は、そのようにして『広辞苑』を読んでみて、自分が知らなかった言葉、意

味をちよつと勘違いしていた言葉などを中心にまとめました。シリーズで三冊出しているのですが、一冊目は「心とからだ」、二冊目は「男と女」、三冊目は「花鳥風月」と、それぞれにテーマがあります。

じっくり『広辞苑』を読んでみてつくづく感じたのは、日本語ってビジュアルな言葉なんだということです。字面がわからないと意味がわ

からない。

たとえば「つきう」「すけさんばい」って、音だけで聞いても何のことやらという感じですよ。でも「衝き居」「助三杯」と漢字になると、何となく「こんなことかな」と伝わってくるものがありますよね。

意味は、

【衝き居】どすんと座る。ついで。

【助三杯】酒を飲めない人を助けて

代りに飲む人には、つづけて三杯飲ませること。

同音異義語も大変に多くて、音で聞いただけではパツと意味が思い浮かばない言葉がたくさんあります。日本語にはひらがな、カタカナもあります。基本は漢字文化圏であることを改めて実感しました。『広辞苑』を引いて、さらに白川静さんの『字統』で漢字のルーツを調べるといったことも結構ありました。

## なぜ『広辞苑』？

そもそも辞書をテーマに本を書くことになったのは、半分は出版社の社長さんから「永江さん、辞書は好き？」と聞かれて、「好きですよ」と答えたところ、「じゃあ辞書で一冊作ろうか」と言われたのが始まりで、もう半分は、前から辞書をなごめることが好きだったからです。

高校時代には、英和辞典を読んだり誤植を探すなんてこともしていました。誤植を見つけて出版社にハガキを出すと図書券が送られてくるというので、友人たちとこぞって間違い探しをしたり（笑）。そう考えると、意外と早くから、辞書は引くだけでなく、読むこともできるんだという意識はあったかもしれません。

『広辞苑』の新しい版が出るたびに、

どの言葉が新しく採用されたかがニュースになるという現象も興味深いと感じていましたし、三十歳ぐらいのときに、亡くなった丸谷才一さんが、「日本の書評の欠点」ということをお書きになっているなかで、日本では辞書の書評が出ることは滅多にないとおっしゃっていたのを目にして、読書の対象として辞書もおもしろいと思うようになりました。それ以降、新しい辞書が出たり、辞書の新版が出たりすると気にかけるようにもしていました。

数ある辞書の中で、なぜ『広辞苑』だったのか、というところ、なんだと言った言っても、辞書と言えど『広辞苑』でしよ」が理由です。辞書の中の辞書で、知名度も高い。エッセイの書き出しで「『広辞苑』によれば……」が通用するくらいブランドが確立されています。